

## 2月13日(土) ハープセラピーのご案内

保坂先生をお招きして音楽療法の中でも特に効果があるといわれている、ハープセラピーを『といる』で実施します。保坂先生の活動は、読売新聞多摩版(2014年10月13日月曜日)のコラム「たま人(tamabito)」に紹介されましたのでその記事を紹介します。

7年前ほどの記事となりますが、その後も精力的に医療・福祉の現場で活躍され、ボランティアとして15年間活動されております。

# 病棟に癒やしの音色

患者のために  
ハープを奏でる准看護師  
保坂 須美子さん 43



「死の間際にハープの音を聴かせてあげたい」。保護者からの要望を受けて駆けつけた病室にいたのは、重度の障害を持つ男児。ハープを奏でると、危篤状態だった男児の脈拍と血圧が上がった。「音を感じているんだ」。病室に響き広がる。

たま  
tamabito

一時は持ち直した男児だったが、その数日後に亡くなった。「ハープのおかげで息子は少しでも長く生きることができた。心安らかに最期を迎えられたと思う」。病院スタッフを通じて、男児の家族から感謝の気持ちを伝えられ、改めて活動の意義をかみしめた。

◆ 年末以降、神奈川県立子ども医療センターで活動している。「もっといきたい」と話し、医療・福祉関係者

に機会提供を呼びかける。「一緒に活動する仲間も募集中」。問い合わせはメールで保坂さん(tamasumichan.348.hazuki@gmail.com)へ。

月に1度、国立病院機構下志津病院(千葉県四街道市)の病室で、ハープセラピーのボランティアをしている。本業は八王子市立保育園で働く准看護師。病院へは休日を利用し、立川市の自宅から往復3時間をかけて通う。多い日は20室もの病室を巡るといふ。

昭島市生まれ。准看護学校を卒業後、総合病院に勤務。寝たきりになっている入院患者の存在に心を痛めた。人工呼吸器などの医療機器につながれ、病室で聞こえるのは機械の音だけ。生きる希望を失い、自殺を図る患者もいた。「心のケアがないがしろにされていると感じた。出産、育児を機に医療現場を一時離れ、レストランでアルバイトをしていた頃にハープと出会った。店内のBGMとしてハープが演奏するハープの音色を聞き、「寝たきりの患者の癒やしになるのではないか」と思った。早速、弾き方を習い、約25曲までレパートリーを広げた。

その後、勤務した特別養護老人ホームで演奏してみると、普段は全く反応のない入所者が涙を流したり声を上げたりした。確かな手応えを感じた。海外の病院でハープセラピーが行われていることも書籍で知り、「やはり医療や福祉の現場に取り入れる価値がある」と確信した。

実践の場を広げようと、50か所近い病院にボランティアで訪問したいと申し入れた。ロビーコンサートを開いている病院はあったが、病室での演奏は「前例がない」と断られた。それでも「寝たきりの患者のため、病室で演奏すること」にこだわり続けた。

そんな状況が続く中、音楽仲間から同病院を紹介されて道が開けた。2012年5月に活動を始めた当初は小児科病棟だけだったが、評判を呼び、現在はほぼ全ての病棟を回る。患者だけでなく、介護に疲れた保護者から感謝されることも多い。「いつかは在宅患者のためにも弾きたい」。医療と音楽の双方に携わってきた自分だからこそ、患者のためにできることがあると信じている。(蔵本早織)